

# 日露戦争と地域社会

——北多摩郡村山地域を中心に——

はじめに

- 一、日露の開戦と地域社会
- 二、大陸への出兵
- 三、旅順戦を伝える軍事郵便
- 四、奉天の決戦と軍事郵便
- 五、講和への期待
- 六、日露戦争と村山地域  
むすびにかえて

松尾正人

## はじめに

日清戦争に勝利した日本に対して、ロシアがフランス・ドイツとともに、「三国干渉」を行ったことはよく知られている。日本は遼東半島等の返還を余儀なくされ、国内にロシアに対する「臥薪嘗胆」の思いが強まった。その後、日本は明治三五年（一九〇二）一月に日英同盟を締結している。ロシアとの間で新たな朝鮮と満州（中国北東部）の権益をめぐる交渉を重ねたが、ロシアの対応は期待できるものでなかった。総理大臣の桂太郎と外務大臣小村寿太郎は、ロシアとの対決を覚悟し、明治三七年（一九〇四）二月六日には、ロシアに対して国交の断絶を通告している。そして同月八日、日本海軍が仁川沖でロシア艦船を攻撃したのであった。

この日露戦争について、開戦を地域社会がどのように受け止め、ロシアとの戦いにいかに対処したのかについては、その検討がなお必要のように思われる<sup>(1)</sup>。戦地への動員と大陸での戦闘、出征兵士に対する家族や町村の支援、凱旋と慰霊など、その実態は地域社会のありかたを反映し、必ずしも一様ではない。現役徴集あるいは町村から「赤紙」で召集された兵士の出征、戦地での体験と家族や郷里への思いは多岐に及ぶ。

本論では北多摩郡とりわけ村山地域を取り上げ、日露戦争と地域社会の関係を考察する。北多摩地域では、「武蔵村山市史」「小平市史」などの編纂事業が進み、日露戦争と地域社会の関係を考察する。北多摩地域では、「武蔵村山市史」「小平市史」などの存在が明らかになっている<sup>(2)</sup>。ここでは、野戦砲兵連隊に配属されて軍馬の輸送や遼陽・奉天の戦争を体験した輜重輸卒の原田寛三<sup>(3)</sup>、そして野戦病院付として旅順・遼陽の戦いを身近に経験した看護手の指田昇<sup>(4)</sup>の「軍事郵便」を活用する。村山地方の中藤村外三ヶ村組合から出征した兵士のその後を追跡し、家族・関係者との手紙や諸記録等を通じて、大陸に送られた兵士の思いなど、戦争の実態を明らかにする。また、村山をはじめとする北多摩地域と日露戦争の関係を検討し、特に兵士を送り出した町村の対応、兵士を支えた家族や地域社会の実情を追究する。戦場に出征した兵士を送った村山地域の村民にとって、日露戦争がどのようなものであったのか、戦争が地域社会に

いかなる影響を与えたのかを論究したい。

## 一、日露の開戦と地域社会

日英同盟を明治三五年（一九〇二）一月に締結した日本は、米国の支持を得られるようになる。翌三六年八月に新たな朝鮮と満州（中国北東部）の権益をめぐる協商案をロシア外相ニコライ・ラムズドルフへ提出した。一〇月にはロシアの駐日公使ローマン・ローゼンが来日し、小村寿太郎外務大臣と東京で交渉を開始したが、朝鮮・満州への進出を企図するロシア側の対案は期待できなものでなかった。首相の桂太郎や小村外相らは一二月に入るとロシアとの戦争を決意している。海軍は一二月二八日に連合艦隊を編制し、東郷平八郎をその司令長官に任じている。同月三〇日には参謀本部、軍令部首脳会議が招集され、開戦時の陸海軍共同作戦計画が決定され、兵力の急速な動員が実施された。翌明治三七年二月二日には大山巖参謀総長から開戦不可避が上奏され、桂首相の奏請で四日に天皇の召集した御前会議が開かれ、五日にロシアに対する最後通牒が行われた。六日に栗野慎一郎特命全権駐露公使がロシアに国交断絶を通告して、八日に海軍が仁川沖で戦端を開いたのであった。

日本側は陸軍の先遣隊を朝鮮半島の仁川に送り、海軍は明治三七年（一九〇四）二月八日、仁川沖のロシア砲艦コレーツ、そして旅順港外のロシア艦隊を攻撃した。同日に陸軍を仁川に上陸させ、同港内に逃れたコレーツと碇泊していた巡洋艦ワリヤーグを翌日の仁川沖海戦で撃破している。日本は朝鮮半島の確保と満州に向かう陸軍の進撃を容易にして、二月一〇日にロシアに対して宣戦布告を行っていた。

東京府の多摩地域、とりわけ北多摩郡諸村では、この開戦にともなう兵士の召集・動員が急であった。村山地域の中藤村外三ヶ村組合の中藤村では、宣戦布告の三日前に、二名が入営していた。同組合の関係者が、「高橋君・久野君入営、僕村山迄送りタリ」と書いている。仁川沖海戦については、二月九日に「午後四時三近キ頃、日本艦仁川二行キシトキ他艦モアリシガ、露艦ト戦ヒ露艦ノコレイツハ破リタリ」で、ワリヤーグは「日本ニトレリ、此レ即

チ一等巡洋カン」とある。二月一〇日には仁川沖の海戦の勝利が伝えられ、開戦の情報地域に急速に広まっている。村民の関心も強く、二月二五日には中藤村西部の目吉学校において、日露戦争のことなど、軍事にかかわる講話が行われた<sup>77</sup>。そして中藤村外三ヶ村組合では、三月八日にも中藤村の赤堀・萩ノ尾地区で三名の入営が続いた。その乙幡加三、加藤初七郎、野村森次の三名の壮行に際しては、同校の生徒たちが万歳を唱えて見送っている。三月一四日には、同村でも日本海軍がロシア側の軍港旅順を砲撃したこと、火薬庫を「爆烈」したことなど、その戦果が報じられた。

日本国内の日露の開戦に伴う軍事力の集中が、徴兵令による国民皆兵と、それに対応した町村のあり方に支えられていたことはいうまでもない。日露戦争期の徴兵検査は各郡が中心となり、明治三十七年（一九〇四）の中藤村外三ヶ村組合の場合は、北多摩郡長橋口常彦から「北多摩郡告示第一一〇号」によって、徴兵検査の実施が伝えられていた<sup>78</sup>。同組合では、検査前日に該当者を組合に出頭させ、各自の負担で府中町の指定の旅館に宿泊させている。検査は砂川村・小平村と合同で、七月二一日の午前八時に開始であった。翌二二日が田無村など五村、二三日が調布町と三村、二四日が府中町と三村、二五日が立川村及び高木村と中神村の順番になっている。徴兵署は府中の北多摩郡役所に置かれ、検査の合格者の中から抽選が実施された。郡内の甲種合格及びそれにつぐ第一乙種を含めた抽選が行われ、歩兵、騎兵、砲兵、工兵、輜重兵、水兵、機関兵などの徴集者が決まっている。

このような徴兵検査の徴集者を基礎として、開戦後は予備役等の召集が進められ、兵員の確保がはかられた。各町村では兵役義務の徹底が推進されている。中藤村外三ヶ村組合内の岸村では、明治三二年（一八九八）一二月に同村の原田林七らが発起人となって青年会を組織していた<sup>79</sup>。同会は弊風の矯正、民俗の改善などを掲げ、青年層による風俗の美化、産業の振興、勤労の推進をめざしている。三五年二月には、会の名称を岸村青年厚信会と改めた。その活動として、特に「国家干城タル兵士ノ送迎」を重視し、徴集や予備役等の入営に際しては、同会役員等が立川停車場で入営者を見送っている。

もともと岸村では、国内の窮乏を背景にした儉約論を訴える声なども存在したようだ。しかし、そのような動きも

三七年二月の日露開戦で一変したという。「厚信会沿革誌」<sup>10)</sup>には、「日露ノ戦端北清ノ野ニ開カルルヤ、志気大ニ昂進シ、国民拳ヲ膺懲ヲ謳歌」して、同村の勇士が「皆召ニ応ジテ万里遠征ノ途ニ上ル」とある。開戦となったことで、国内にナシヨナリズムが高揚し、動員が一挙に進んでいた。厚信会は三八年三月に諸江寅吉が中心となって恤兵部を設置し、出征兵士の慰問、傷病兵の「撫安」、応召者の激励などを行っている。大國のロシアの極東進出に対する反発、遼東半島の返還に加えた朝鮮半島の危機の現実化が、その背景に存在したことはいうまでもない。

この岸村の「厚信会」では、二月一〇日のロシアに対する宣戦布告後、三月一〇日に立川駅で岸村出征者の原田林七と原田寛三を見送っていた。同月中は福井松五郎、小川栄吉、荒田武平、石川仙太郎、宮崎昇、小川松一郎らの「壮行」が続いている。二月二〇日には荒畑甚五郎、同月二四日には諸江又七の出征を送っていた。

また、戦地への動員は、兵士ばかりでなく戦場の兵士を支える軍夫の確保も重要で、村役場がその一端を担った。中藤村役場が、同村の川島庄作の動員に際して、身元証明書を出していることがそれを示す。品行方正であるかを確認し、刑罰あるいは「家資分産破産等ノ宣告」との関係を明記した証明書を作成していた<sup>11)</sup>。大陸での大規模な戦争を継続するためには、弾薬や食料の輸送はもとより、負傷者や病人の戦場からの「後送」など、大量な人力を必要としたことはいうまでもない。その軍夫もまた各町村から志願者を出させ、町村の協力を背景にした動員・確保を進めたのであった。

一方、国内では日清戦争後、軍人に対する後援団体の組織化が進んでいた。日露戦争が現実となった明治三七年(一九〇四)三月になると、内務省所轄の財団法人である帝国軍人援護会が結成されている。有栖川宮威仁親王を総裁とし、出征軍人の家族、戦病死者・傷痍兵の援護を目的として、寄金を募っていた<sup>12)</sup>。各府県では、管下の市町村に指示し、兵員慰勞義会、尚武会、婦人会などの組織化が進められている。それらが、応召者の送迎、家族の賑恤、戦病死者の葬祭などを担当した。北多摩郡の場合は、明治三四年(一九〇一)度施行の「北多摩郡兵員慰勞義会準則」<sup>13)</sup>が、その後の各村の慰勞義会の基礎となっている。中藤村外三ヶ村組合の兵員慰勞義会では、村長が会長となり、各組の組合議員から二人、在郷軍人から八人、各字から一人ずつの合計三二人が委員に任じられたようだ。

その目的は、陸海軍から帰郷した者を慰勞し、「尚武ノ義氣」を振興することと記されている。具体的な活動としては、従軍兵家族の生活困難者を扶助すること、戦死・従軍病死者に弔意を表すこと、凱旋帰郷兵を優待することが掲げられ、毎年一回の慰勞式を予定していた。

この日露戦争が膨大な軍事支出を余儀なくさせ、その負担が町村に課せられたことはいうまでもない。村山の中藤村外三ヶ村組合もまた、開戦直後に村長の上村行業が先頭に立って左のような軍事公債の負担を求めていた。

「日露交渉断絶シ、宣戦之詔勅發セラレ候ニ付テハ、交戦之事ハ軍人之任務ナルモ、國民之後援ナクンバ必勝期スヘカラサルハ今更言ヲ待タサル次第ニ有之候、右ニ付キ此度募集相成候軍事公債之義ニ付、篤卜御協議及度有之候条、明二十五日午後二時、日吉学校へ御参会相煩ハシ度候也

明治三十七年二月二十四日

中藤村外三ヶ村組合

村長 上村行業 印

乙幡市郎殿

上村行業村長自身が、中藤村の乙幡市郎などの有力者に参会を求め、軍事公債に関する協議を呼びかけている。組合村内の有力者に協力を求め、同公債を通じた資金面の確保に尽力・奔走するようになったことが知られる。

それにしても、明治三十七年二月から翌年九月まで続いた日露戦争は、明治国家が直面した最大の危機であった。大國ロシアとの戦争は、英・米両国の支援を受けていたとはいえ、日本の国家・将来を賭け、町村の末端にまで厳しい負担を強いる戦いだったのである。

## 二、大陸への出兵

戦争の拡大にともない、国内では現役徴集の兵士に加えて予備役等の入営が続き、部隊編成が進められた。明治三

七年（一九〇四）三月一〇日に村山の中藤村外三ヶ村組合の岸村から動員された原田寛三は、世田谷の野戦砲兵第一連隊に入營している。当初は連隊周辺に宿泊し、世田谷村池尻の民家が分遣先になっていた。寛三は同月一八日にその旨を葉書で郷里の父原田平四郎に伝えていた<sup>(15)</sup>。寛三のもとには激励・慰問に来た面会者があり、休日には友人と王子の飛鳥山や上野、あるいは日比谷公園などを見物している。二五日には弟の入營を見送りに来た同郷の荒田正平が、寛三に面会ができたことを早速、岸村の原田家に伝えていた。寛三自身も四ッ谷にあつた縁戚の浅見文次郎、杉田辰五郎家を訪問していた。それでも寛三は、実家が村山の中心的な養蚕農家であつたことから、養蚕業の様子が心配だつたようで、親類・縁者を含めた多忙な実家を氣遣う書状を平四郎へ書き送つている<sup>(16)</sup>。

また、中藤村原山の指田昇は、日清戦争後の台湾平定作戦に出征し、日露戦争で再び動員されてゐた。指田家は陰陽師の家系で医学に通じ、指田昇の父鴻斎（穂十郎）は医師として地域に重きをなしてゐた<sup>(17)</sup>。二五歳の昇は第一師団の第一野戦病院附の看護手となつてゐる。明治三十七年三月二二日には品川駅を軍用列車で出発し、同師団の出発地となる広島に向かつてゐた。戦地をめざす昇らを見送る各地の歓迎ぶりは大変で、昇はその様子を両親・兄弟一同に宛て、左のように書き送つてゐる。

「吾々軍人之歓迎之為め、各駅プラットホームノ両側に集合し、国旗オダワラ提灯を動かし、国旗ヲ挙ゲテ男女之別なく万歳々々之声天地ニ轟き、其況景ハ余等之とても言語文書ニ顯ハス事のできぬ程の有様ニ御座候、中ニモ平塚駅之如キハプラットホーム両側二人塚を積むが如き有様、国旗を挙げ軍隊を歓迎する事、殆んど人のなす事には思われぬ様に御座候、（中略）平塚駅ヲ時間ニテ乗車出発、沼津駅も前記同断、是より京都・大坂・神戸との名義ある駅の吾人・軍人之食場にて、必ず吾々軍人ハ下車仕り候哉、此三駅之処ハ歓迎ニテ烟火かがり火等ニテ大火災かとも思う可き様の有様、且又人の駅近所に集合スルコト何万人之多きか其数を知らず<sup>(18)</sup>」

軍用列車の途中の駅では、国旗が掲げられ、プラットホーム両側に人があふれて、万歳の声が轟きわたつたようだ。列車の主な停車駅では、篝火が焚かれて大変な歓迎で、兵士には食事やビールが振舞われた。指田昇は、食堂に入ろうとすると上等の酒食でもてなされ、一人に対してビール一、二本が馳走されたという。広島駅の到着は、二四

日の午後一〇時三〇分であつた。指田は広島島の宇品からの自身の乗船予定を四月五、六日頃と書き送つていたが、こちらは軍事上の秘密で、決して他人に吹聴しないように断つてゐる。そして広島市内では、宿舎となつた馬屋原小三郎宅の親切にも感激してゐた。宿泊した兵員たちの舎長であつた昇は、その馬屋原宅に札状を送るようにならぬ村の実家に依頼したのであつた<sup>(19)</sup>。

一方、野戦砲兵第一三連隊補充中隊に配属された岸村の原田寛三も、指田昇と同様に広島に向かい、砲兵隊に欠かせない軍馬の輸送に従事した。明治三十七年（一九〇四）六月七日には広島を出発し、宇品で三五〇〇屯の和泉丸に軍馬を乗せて出港してゐる。そして一二日に、第二軍兵站司令部が置かれた清國の遼東半島の張家屯に上陸した。第二軍はすでに張家屯とその周辺に上陸し、野戦砲兵第一三連隊は同軍の中核的な砲兵隊となつてゐる。寛三が上陸した兵站司令部の張家屯は、食料や軍用材料が積まれて山をなしてゐた。兵站司令部が中国人を雇ひ、徴發した車両に加えて、「馬牛ラバヲ以テスルモノ其數幾千人ナルヲ知ラザリキ<sup>(20)</sup>」となつてゐる。

その原田寛三は、上陸地の張家屯から内陸に進撃した野戦砲兵第一三連隊を追及した。転角房の連隊司令部に向かい、さらに軍馬とともに砲兵隊の宮家屯へ前進してゐる。復州に近い宮家屯までは、山また山、畑また畑の連続であつた。宮家屯に到着すると、すでに「我十三、十四、十五ノ三個連隊ノ陣地ニテ砲列ノ布キアル事ハ實ニ驚キ申候」であつたという。軍馬の輸送の苦心については、「水ノナキ事及民家不潔、風景ノ粗悪ナルコト」、及び往復ともに露營を余儀なくされて、実に閉口しようだ。寛三は帰途に三日を費やして、六月一六日に上陸地の張家屯に立ち戻つてゐた。そして、寛三は一八日に仁川丸に乗船し、二三日に宇品に帰着して、その後は世田谷の連隊に戻つてゐる。寛三は初めての軍馬の輸送の体験について、父平四郎に宛て「海上無事只今当港ニ上陸仕候条不取御報候」と書き送つた<sup>(21)</sup>。四ツ谷の親類杉田家、さらに世田谷兵營に面会で訪れた知人にも伝えている。

また、この輸送作戦に関しては、対馬海峡さらには太平洋側までロシアのウラジオ艦隊が出撃し、日本側の輸送船が攻撃される事態を生じてゐた。陸軍將兵等を輸送中に撃沈された常陸丸では、中藤村外三ヶ村組合の三ツ木村出身の陸軍歩兵二等卒の水越久之助が、遭難・死亡してゐる<sup>(22)</sup>。原田寛三らが日本から張家屯まで乗船した和泉丸も、



図1 日露戦争概略図



日露戦争と地域社会（松尾）

その後の帰路でウラジオ艦隊の攻撃をうけて撃破されていた。寛三は張家屯に戻ってそれを知り、その危機を郷里の原田平四郎らに書き送っていた。寛三にとつても他人ごとでなかったことはいまでもない。

一方、中藤村外三ヶ村組合の原山では、明治三十七年（一九〇四）一月に指田昇の兄誠一郎が、清水談々堂の協力を得て原山住民を代表し、出征兵士に対した慰問状を作成していた。日露戦争を「有史以来の大戦」と位置づけ、日本が今回の「義戦」で「露国の暴戻無道を膺懲」し、東洋の平和を保全することで、世界の正義人道のためになると書いている<sup>23</sup>。戦争を「我が帝国の光栄」が高く評価されるための千載一遇の機会とみなしていた。誠一郎もまた出征兵士の多大な艱難を慰問するとともに、戦争の目的を遂行することの必要を強調したのであった。この日露戦争については、社会主義者の幸徳秋水・堺利彦、あるいはキリスト教の立場から内村鑑三らが非戦論

を唱えたことが有名である。しかし、中藤村外三ヶ村組合にはそのような動きは顕在化していない。大國ロシアとの命運をかけた戦争ということで、同組合の地域全体が異様な興奮に包まれている。指田誠一郎もまたロシアの「暴戻無道」に反撃し、正義を貫徹することが、帝國日本の発展につながる旨を論じたのであった。

### 三、旅順戦を伝える軍事郵便

日露戦争の開戦後、朝鮮半島の北部に集結した第一軍の近衛師団と第二、第一二の各師団は、明治三七年（一九〇四）五月一日に鴨緑江を渡河し、中国北東部の満州へ進撃した。第二軍の第一、第三、第四、第五の各師団は、五月五日から遼東半島南部の張家屯・塩大澳周辺に上陸している。その第二軍は同月二六日、大連・旅順に向かう途中の南山の戦いで、ロシア軍との最初の本格的な戦闘を交えた。陣地に立て籠ったロシア軍の機関銃と野砲に苦しめられ、結果は南山の戦いだけで、四三〇〇人余の死傷者を出している。

第二軍は大連を占領した後、ロシアの満州軍総司令官アルクセイ・クロバトキンの率いるロシア軍との決戦に向けて北上し、遼陽に向かった。一方、遼東半島の最先端の旅順については、当初は日本側が港を封鎖する閉塞作戦を実施したが、その閉塞が失敗し、旅順要塞の攻撃に着手している。新たに第一と第一一兩師団及び第九師団を加えた第三軍を創設し、日本に來航するバルチック艦隊が利用できないように、旅順の攻略をめざしたのである<sup>21</sup>。

この旅順攻略に際しては、村山の中藤村出身の指田昇が、第一師団の第一野戦病院に配されていた。看護手として従軍していた昇は、明治三七年（一九〇四）七月二〇日に実兄の指田誠一郎に対して、遼東半島の戦地から左の書状を書いてゐる。

「謹啓時下不順之候、陳者過般糸田店ヨリ書状ニて拝見仕候処、御両堂御老人様始め皆々様ニハ、何モ御障りも御座無く御暮し遊され候御欣喜の至り哉ニ存じ候、次に降て生儀出征以來頗る壯健にて事務罷在候間、乍憚御放念被下可く候、次ニ我が第一師団ハ南山占領后、第三軍ニ編入相成候、目下我三軍第一師団ハ旅順攻撃の主務を命

せられ某地に滞在罷在候方、何れ旅順攻撃も近きの内と存候、付テハ当病院も開戦の節ハ必ず参加仕り候、其節ハ又々御案内申上可く候、扱て過般ハ誠ニ結構なる中央新聞六月二十九日より七月二日迄で四日間御送附被下、本日到着難有拜見仕候、先ハ乱筆を以て御礼迄で頓首(25)」

指田昇は、南山占領後に自身の所屬する第一師団が第三軍に編入され、旅順を攻撃する同師団の野戦病院所屬になつたことを中藤村の兄の誠一郎に報じている。旅順攻撃が近いこと、元氣に軍務に携わつてゐることを伝えていた。同時に誠一郎から送られてきた日本の新聞や軍事郵便を入手し、感謝してゐる旨を書いている。

もつとも、八月に入つて旅順攻撃の前哨戦が始まると、旅順要塞を指す戦いは容易でなかつた。その緊迫した戦鬪の一端は、八月一二日に指田昇が書いた誠一郎宛ての左の書状に窺われる。

「二仲、我軍ハ南山占領後、南関嶺の敵を追撃して、三十里堡及前革鎮堡を占領、それより後革鎮堡及び中部西部東部王家屯の敵兵を又も追撃して前牧城子及び營城子を占領仕候、次ニ敵の根拠共もすべき双台溝、土城子を去月三十日大激戦を仕り、敵は敗れて旅順に接近せる処の大孤山・小孤山に依り、大いに我軍を頑強に抵抗仕り候処、一昨日十日大、小孤山はまたまた占領仕り候、次に我軍ハ旅順攻撃の戦備の爲め防禦工事を爲しつ、あるを、敵ハ毎夜襲撃しつ、有之候、僅かに我陣の距離二、三千米、突撃の接近仕り砲声を聞く事殆んど百雷の轟くが如くに御座候也、就てハ旅順陥落ハ向七週間内外ニ占領の事と存上候や、先ハ近況迄で御知らせ申上候

八月十二日

指田 昇 拝

指田誠一郎様(26)

日本の第三軍は、要塞の外郭に位置する双台溝や土城子を突破し、要地となる大孤山・小孤山を占領したが、ロシア軍の抵抗は頑強であつた。ロシア軍は、日本軍陣地の防禦工事を妨害し、夜襲などによる反撃を繰り返している。野戦病院勤務の指田昇は、八月一二日付で兄の誠一郎に宛て、ロシア軍の突撃や接近の動きが頻繁で、さらに砲撃の音などが、雷のように鳴り響いてくる旨を報じていた。

このような外郭陣地の攻略を重ねた上で、旅順要塞に対する日本軍の総攻撃は第一回が八月一九日から実施され

図2 旅順要塞攻略図



島貫重雄著『戦略・日露戦争』下 (1980年, 原書房) を参照。

た。第三軍の三個師団が全力をあげてロシア軍陣地を攻撃している。しかしロシア側の盤龍山や望台は、コンクリートを用いた強固な防禦陣地となっていた。山の斜面を登る日本軍の歩兵は、ロシア軍の機関銃射撃で戦死・負傷者が続出している。日本軍も機関銃を有していたが、前進する日本兵に対するロシア側の射撃が特に有効であった。ロシア軍は関東軍司令官アナトーリイ・ステツセル中將のもとでコンスタンチン・スミルノフ少將が指揮をとり、砲兵の射撃が正確で、その着弾が日本軍を苦しめたという。要塞内のロシア軍は、八月一日段階で四万七〇〇〇余人に達していた(7)。

日本軍の第二回目の総攻撃は、明治三十七年一月三〇日に開始された。しかし、第一回と同様に歩兵の突撃は失敗に終わっている。指田昇は一月一四日の手紙で、毎目のごとくに負傷者や病人が出ている苦戦を、村山の指田家に宛て、左のように報じていた。

「尚包圍攻撃も日々限に歩を着々と進め居り候へ共、中々はかばかしく相運び申さず候間、

此の分ナレハ本年中ニハ陥落ハ計リ難ト軍人中にての専らノ風説に御座候、就テハ毎日開戦ハ仕らず候へ共、少  
なからず一日五、六名之負傷者に六、七名之病者ハ絶申ス事之なく候、当病院ハ十月二十三日開設命を拜けて今  
日に至る迄で戦闘ハ開始仕らず候共、収容患者數負傷者二百名、病者百五十名を超申スニ至り候、先ハ近況ま  
で、草々<sup>二二</sup>

看護手の指田は軍医のもとで、負傷者の介護等に奔走していた。大きな戦闘がなくとも毎日のごとくに負傷者や病  
人が出る苦戦を報じている。そして第二回総攻撃が失敗したことから、軍人のなかにも年内に旅順を陥落させること  
が難しいとの風説があると書いていた。日本側に悲観論が出ていることを伝えている。

大苦戦に直面した日本軍は、第三軍にさらに第七師団を増強した。軍司令官の乃木希典大将をはじめとする第三軍  
に対しては、「諜報勤務ヲ輕視シ、直ニ落ツルト考ヘ、攻城戦ノ準備モ不十分ニシテ、殊ニ砲兵ノ準備不良ナリ  
シ<sup>23</sup>」という批判が存在したようだ。満州軍からは、総参謀長の児玉源太郎が九月一九日に再度視察に第三軍司令  
部を訪れ、指揮をとるようになっていた。日本軍は、第一回総攻撃の失敗後、内地の海岸要塞から二八センチ榴弾砲  
を旅順に移し、砲力の強化に着手していた。そして一月二六日からの第三回の総攻撃では、ロシア軍陣地の正面だ  
けでなく、二〇三高地（爾靈山）への攻撃に着手している。激戦地となった二〇三高地に対しては、歩兵がロシア軍  
陣地の直前まで塹壕を掘り、一二月四日に重ねての総攻撃を実施している。いったん占領した同高地がロシア軍側の  
反撃で奪回されると、児玉は同高地に攻め上る歩兵に併せて榴弾砲を打ち込むように命じたという<sup>24</sup>。二八センチ  
の重砲でロシア側の反撃を封じ、増援の予備隊を数次にわたって送り込み、やっと二月六日に二〇三高地占領が確  
実になっている。その後は、同高地などからの観測による日本側の重砲の活用が有効になり、港内の残存ロシア艦隊  
に対する砲撃を徹底することができたのである。

かくして第三軍は、明治三八年（一九〇五）一月二日に旅順のロシア軍を降伏させることに成功した。国内では勝  
利を報じる戦勝の号外が出されている<sup>25</sup>。もっとも、旅順攻撃の第三軍の戦死者は一万五八〇〇余人で、負傷者を  
あわせた損害が五万九四〇〇余人に及んでいた。それでも、難攻不落の旅順が開城した知らせは、村山の人々にも安

堵の思いを強くさせたようで、左のように記されている。

「明治三十八年一月二日、旅順城陥落ヲ祝ス、是レヨリ先我ガ第三軍（乃木大将）ノ旅順背面ニ向フヤ、劈頭金州・南山ノ露兵ヲ一戦ノ下ニ攻メ破リ、着々歩ヲ進メテ難戰苦闘、備サニ辛酸ヲ嘗メ、數回ノ補充軍ヲ用ヒテ而カモ容易ニ奪取スルヲ得ザルコト半歳ヲ超ユルニ至リシカバ、国民皆手ニ握汗シテ期待スル折柄、凶ラズモ新年ト俱ニ喜ブベキ吉報ニ接センコトナレバ、我が村民勇躍欲ヲ極メ、夜ヲ徹スルノ勞ヲ辞セズシテ大ニ祝捷ノ宴ヲ張レリ」<sup>(32)</sup>

ロシア軍との激戦に手に汗を握る思いであった村民は、正月と重なった旅順陥落の吉報に大喜びであった。中藤村外三ヶ村組合の岸村では「勇躍欲ヲ極」で、祝賀会に向けて準備を徹夜で行なっている<sup>(33)</sup>。同村の小学校では号外で旅順陥落を知り、二個の「豫門」を作成していた。一個は校庭に建て、他の一個は小川万次郎家に運び、同家の桑園に赤十字を造ったという。翌三日の朝には学校の庭の緑門の上に「祝捷」を書いて祝い、午後からは子供の楽隊が列を組んで練り出し、万歳をとなえた。楽隊の祝賀のパレードは、岸村だけでなく三ツ木村や中藤村などで競って行われたのである。

#### 四、奉天の決戦と軍事郵便

野戦砲兵連隊の軍馬輸送に従事した原田寛三は、ウラジオオストックを拠点にしたロシア海軍の出撃に危うい思いをしたが、その後、再び満州（中国北東部）の戦場へ移動した。寛三は明治三十七年（一九〇四）一月三〇日に遼東半島の柳樹屯に上陸した後、北上して得利寺、蓋平、海城、そして遼陽に進んでいる<sup>(34)</sup>。その遼陽では、すでに日本側の第一・第二・第四の各軍が、八月二八日にロシア軍を総攻撃し、九月四日に同地を占領していた。遼陽の戦いは、両軍の主力が激突した大規模な戦争で、苦戦を重ねてなんとかロシア軍を後退させることに成功している。日本軍の戦死者四九〇〇余人、負傷者を合わせると二万三五〇〇余人で、死傷者は退却したロシア軍より多い。それでも

遼陽の戦いの勝利が報じられると、日本国内では各地で提灯行列等の祝勝会が行われた。村山と同じ北多摩郡の調布では、「祝捷トシテ家別国旗」を掲げ、夜には「布田楽隊行列」や提灯行列が行われている<sup>35</sup>。

しかし、ロシア側は遼陽の戦い後も、満州へ兵員・武器・弾薬を送り込んでいた。ロシア軍はシベリア鉄道から東清鉄道を敷設してハルビン、そして南進して奉天へ兵力を集中し、三七年一〇月には反撃に転じて沙河会戦を引き起こした。翌年早春には日露両軍の主力の決戦が不可避とされ、日本側も遼陽からさらに北上した奉天の占領を企図するようになっていく。

そのような戦争の拡大にともない、村山の中藤村外三ヶ村組合では予備役等からの動員が続いた。岸村の原田平四郎は寛三に対して岸村の応召の状況を、荒畑甚五郎が三七年一二月に北海道第二六連隊へ入営し、現在は「征露」に従軍していると書き送っている。諸江又七がやはり同月二五日に麻布第一連隊へ入営したこと、長塩信一が翌年一月に世田谷砲兵連隊へ入隊したことなどを報じていた。豊泉喜一郎が第一國民兵として青山練兵場に集められ、貴族院議員の郷純造の屋敷を宿営として、兵事に頑張っていることも紹介している。「軍国」の我が地方の正月は形だけとし、寛三に対して後顧の憂えなく奮励するように書き送っている<sup>36</sup>。同村では、前述のように厚信会に「恤兵部」が置かれ、出征者の慰問あるいは傷病者の後援等が推進されていた。「在役兵」を激励し、一身を犠牲にしても「那家ノ為」に尽力することを期待していたのである<sup>37</sup>。

そして両軍が対峙した満州では、明治三八年（一九〇五）一月二二日からロシア側が先手を取り、二五日に黒溝台の戦いが始まった。後の奉天の決戦につながるこの黒溝台の会戦については、原田寛三自身が遼陽・烟台等を経て一月一九日に本溪湖に到着し、その後に黒溝台の戦闘に直面している。寛三は実家に書き送った書状で、行軍途中にロシア兵と出会い、「多少之戦闘」になったことを伝えていた<sup>38</sup>。寛三自身は、幸いにも無事に本隊へ合流でき、安堵したのであった。

その寛三は、兄嫁の実家となる同じ岸村の豊泉七蔵に宛てた二月五日付の書状で、十里河でロシア軍の攻勢に会い、苦戦した旨を報じていた<sup>39</sup>。ロシア軍は、「我軍ノ左翼ヲ抜カシ」として、二六日から「間断ナク夜ハ夜襲、昼

ハ銃砲火」で攻撃してきたという。黒溝台方面からのロシア軍の攻撃に対しては、自分たちも十里河を出発し、交戦したと伝えている。寛三は日本側の第一師団と第八師団が多大な死傷者を出したことも書いていた。もつとも寛三は七蔵に宛て、ロシア軍の捕虜は「毎日二、三拾名位ハ来リ居候、是一ツ見ル毎ニ実ニ愉快ニ覚ヘ、面白ク日ヲ送り居候」と、その心境を書いていた。ロシア軍の攻勢で日本側は多くの死傷者を出したが、黒溝台のロシア軍を撃退することができ、その後の奉天での決戦が可能になっている。

一方、明治三十八年（一九〇五）二月に入ると、岸村でも荒畑駒吉、豊泉弥吉、諸江豊次郎、福井愛吉、豊泉太十などの入営が続き、厚信会でも壮行会が頻繁であった。岸村の原田平四郎は、戦地の次男寛三から二月二三日付けの書状を受け取り、厳しい戦争の実情を知ることができたようだ<sup>(40)</sup>。それでも内地の新聞では、戦争の再開が近づくと、日本軍の奉天占領をめざす記事が書かれていた。平四郎らの家族も、戦地の寛三に対して、野戦砲兵連隊の一員として充分に奮戦・敢闘するように激励している。平四郎は、列国が注目しているとし、「大和男児の本領を發揮」すること、同時にその任務を全うすることを希望する旨を書き送っていた。もつとも平四郎は三月九日に寛三へ宛て、それまで新聞が講和のことを連載していたが、奉天の戦いが始まると講和の記事が無くなったと書いている。その上で奉天の戦いが決着すれば、改めて講和の方向が強まるだろうと、自身の期待を伝えていた<sup>(41)</sup>。

この奉天の戦いは、二月二一日に日本軍が攻勢を取り、右翼の鴨緑江軍がロシア軍を攻撃したことで全面的な戦争になった。日本軍が二四万九八〇〇余人を動員し、三月一日には左翼の第三軍がロシア軍に対して攻勢に転じている。ロシア軍は三六万七二〇〇余人の兵力を集結させていたが、包囲体制を取っていた日本側の鴨緑江軍や第三軍との戦闘、さらに前面の第一、第二、第四軍との個々の戦いに追われていた。最終的には、日本側から包囲攻撃されることを恐れたロシア軍が後退している。日本軍は三月一〇日になんとか奉天を占領することができ、まさにぎりぎりの勝利であった。そのことは、ロシア軍の死傷者が九万余人と捕虜二万余人で、それに対して、日本軍の戦死・負傷者も七万余人に及んだことに窺われる。

そして原田平四郎は、寛三の戦地からの元気な三月一五日付けの書状が届くと、その喜びを直ちに返信している。



奉天の決戦に勝利し、「相変らず壯健にて軍務に罷在」ことを祝つていた<sup>(4)</sup>。日本の満州軍が、「戦術最上の理想に適する功妙を極め」て、実に今回は世界に未曾有な勝利であつたと称賛している。奉天の戦争でロシア軍捕虜が四万人以上と内地に報じられるや、敵の総師クロバトキンも総指揮官を免じられるか、白旗をかがげて降伏するしかないだろうと返信している。そして、今回の満州派遣軍のはなばなしい大勝利が、同盟国の英国を驚喜させ、世界の列国が「日本軍の精妙なる軍略に賛嘆」するようになったと書いたのであつた。

一方、原田寛三に対しては、実兄の原田林七の嫁になる。りき。からも五月六日付で、寛三の書翰に対する返信が送られていた。兄嫁の。りき。は、出征中の義弟寛三を気遣い、軍人諸士を思うと、花見などの呑気のさたにはいられず、つまらなく過ぎた旨を書いている<sup>(5)</sup>。そして、奉天の大戦の様子を承知したが、「戦争ほど世の中悲惨極まるものなきと、涙の流る、止まらず」に悲しんだ旨を伝えていた。寛三に対して、「彈雨」の中でもかすり傷をも受けずに名譽の感状を賜わつて凱旋することをお願い、忠勇義烈の兵士に謝意を申し上げたいと重ねて書いている。原田家が養蚕の掃立てに頑張つていること、国民一般が軍費調達にいとわなないことを伝えていた。戦争がはやく終ることを願ひ、寛三の身体無事の願ひをくりかえし記しているのが、兄嫁。りき。の思いを窺わせる。

もつとも、村山では奉天の戦いの最中にも兵士の動員が続き、諸江豊吉や一時除隊帰郷中の福井愛之助にも召集令状が到来していた。徴兵の在営期間が改められ、現役兵や予備役だけでなく、さらに後備役・補充兵役までの召集が行われ、動員の厳しさが増している<sup>(6)</sup>。原田平四郎は明治三八年（一九〇五）三月一日に寛三に宛て、同村の荒田武平が負傷したことを伝えていた。荒田は近衛師団の歩兵第一連隊に所属し、今度の奉天附近の大会戦において、「山城子山」という所で「名譽の負傷」をしたという。荒田本人から実家へ連絡があり、書面に依ればさしたることないようだと、快癒するであろう見込みを報じていた<sup>(7)</sup>。

そして、平四郎の願ひはもとより、兄嫁の。りき。からの「御身御無事」の書状を受け取つた寛三自身も負傷していた。平四郎は、寛三の戦地での負傷を知り、八月二四日に急ぎ左のような葉書を書き送っている。

「謹啓、時下炎熱其ノ威ヲ檀ニスルノ候、聞ク処ニ依レバ足下ニハ過月馬匹ノタメ負傷シタリトノコト、実ニ心痛

二堪へズ、目下容体如何何度、時局柄養生專一トシ、一日モ早ク全快以テ御国ノタメニ立ツ様心掛ケ有之、当方ニテモ快方ノ期早ヤカランコトヲ祈リ上アルナリ、次ニ当方ニテハ相変ラズ無事健全ナリ、乍他事安意せよ、先づ取急ギ端書ヲ以テ及照会候也」<sup>46</sup>

短い文面とはいえ、軍馬の扱いで負傷した寛三に対して、生命にもかかわる取り返しのない事態になることを危惧している。二人の息子を戦地に送り、寛三の負傷を知った父親の心配が窺える。そして、原田平四郎は近隣の阿豆佐見天神社の例祭の執行状況を書き、同神社の御守を同封して戦地の息子のもとへ送った。原田家から戦地の寛三に送られた手紙の文面からも、奉天の戦いで勝利後は、戦争の中断と講和へ向けた平四郎の期待が知られる。

一方、主戦場が満州の内陸に移ると、前述した第一師団の野戦病院附看護手の指田昇も、旅順から新たな戦地へ移動していた。指田は明治三八年（一九〇五）一月二〇日に旅順を出発し、二月六日に遼陽近郊に到着している。その指田は、三月一日に始まった奉天の激戦で日本軍が勝利すると、その近況を並木吉五郎と指田一雄に宛て、同月三日に左のように書き送った。

「拜啓 時下追々春暖之候、其後は久く御無音ニ打過ぎ候段、何も々々御仁免被下度候、陳者御尊家には何の御障害も御座無く御暮し遊され候や、如何御伺申上候、次に生も相変らず無事消光罷在候間、他事ながら御休心可被下候、次に陣中ハ戦后ハ一偏して殆んど休戦之姿に御座候、因而陣中にてハ講話説盛かんに行われ候、右之御余、凱旋之期も近き内ならんと存じ居り候也、就てハ一雄義ハ目下何之学校に通校致せしか、御聞かせ被下度願候、若し通学致し居候へ者、勉学せしむる様、貴兄々呉々も御忠告なし被下度願上候也、先ハ乱筆を以て御無音御詫び期之如くに御座候也

三月三十一日

並木様

指田 拜

(47)

指田は、奉天の一大決戦に勝利したことで、日本軍の陣中が直ちに休戦のようになったと報じている。激戦の直後でありながら、戦場から離れた遼陽の病院では、兵士の間で「講和」が話題になっていることが知られる。昇自身

も、甥の一雄の通学先、勉学の向上などへの関心を強めている。

そして指田昇は四月八日にも、中藤村の兄誠一郎に対して、凱旋できる日を心待ちにしていることを書き送っていた。身内の親族の近況を思い、一日も早く帰国して再会できることの願いを書いている。その昇は、誠一郎からの返信が直ぐに届かなかったこともあって、督促の書状を四月二二日付で次のように書き送っていた。

「拝啓、時下春暖之候、陳者御両家皆々様にハ何等御障りも御座なく御健全御暮し遊ばれ候由、□□大賀候、扱て度々書状差出し候へ共、昇に御返信も之なきは如何之次第第二御座候や、御伺申上候、就テハ生儀は無事勤務罷在候間、乍他事御休心可被下候、扱て当院ハ遼河の左岸馬家弧山子と申す地ニ転じ、目下該地ニ於て舍営病院開設中ニ御座候へ共、入院患者とては殆んど少数にて殆んど用なし同様之次第故、毎日徒然ニ打過ぎ居り候者、何か面白しき雑誌なり又小説にてても宜しく候者、御送附儀御依頼申上候、就テハ前文ニテモ度々戦地にては読書之□□、国元々のものを第一楽みて毎日待ち居る様之事候申上置き候へ共、今回之如きは時ニハ尚一層御地々之御書及び新聞紙等が楽みの第一であります故、何卒通信之事、且又新聞紙の如きハ度々願ひ度被存候者、夫れも新聞紙之如きハあまり日附之おくれたるものは無用です、先は右御依頼まで申上候也

四月二十二日

兄上様

指田 拜

(48)

奉天の戦い後は、第一師団でも目立った戦闘が無くなり、入院患者が少なくなったようだ。指田昇は遼河の左岸に新たな舎営病院の開設が進んでいることを報じるとともに、指田自身が激務から解放されたようで、内地からの手紙を期待するようになっていた。指田は凱旋の日を心待ちにする一方で、何かおもしろい雑誌あるいは小説、内地のあまり遅くならない日付の新聞紙を送ってくれるように、兄の誠一郎に依頼していた。

この点、日露戦争期には、満州に配置された各部隊やその兵士と内地家族の間の連絡が、かなりの頻度でかわされていることが知られる。講和談判が行われていた時期は、部隊の移動も限定的となり、軍事郵便の往復、あるいは内地の新聞等を送付することが多くなっている。国内の中藤村外三ヶ村組合でも、ロシア艦隊のカムラン湾近辺への来

航など、東京朝日や国民新聞などの各種の号外が頻繁になつていた。前年一〇月一五日にリパウ軍港を出港して半年余をかけたバルチック艦隊の来航、その後のポーツマス講和の動向など、戦地の指田昇も内地の新聞を読むことを心待ちにしていたのである<sup>19)</sup>。

もつとも、講和談判が進められている時期、大陸での長期の滞在が、兵士の健康を害したことも多かつた。内地と異なる寒暖の差の激しい気候、食生活や衛生面などの問題が多い。この点、医療関係者の配置が欠かせなかつたことはいうまでもない。病院付の指田の帰国が、戦いの停戦状態となつたにもかかわらず、明治三九年二月まで遅れたことがそれを窺わせる。

## 五、講和への期待

明治三八年（一九〇五）三月の奉天会戦で日本側が勝利すると、満州での大規模な戦闘は休止の様相になつた。ロシア側の満州軍総司令官クロボトキンは、皇帝ニコライ二世から罷免され、後任にはリネヴィチ中将が任じられている。ロシアは奉天での敗北後も強大な陸軍を有していたが、兵員輸送等をシベリア鉄道に頼る限界が存在した。一方、日本側も奉天での戦いの戦死・負傷者が七万余人に及び、兵員はもとより武器弾薬の補充も極限に達して、その後の大規模な作戦が困難になつていた。国力の限界は、村山の中藤村で「奉天の其附近の戦落着せば或へは交和相成るべき見込」と、戦争終結への期待が示されていたことに窺える<sup>20)</sup>。日本側は、奉天を掌握するための戦略上の要地の鉄嶺周辺までを確保し、他方で講和条件を有利にする目的で、樺太やウラジオストクへの作戦を企図するようになっていた<sup>21)</sup>。

このような状況下で、日本海軍が明治三八年五月二七日と二八日の海戦でロシアのバルチック艦隊を打ち破つた意義は大きい。同艦隊は前年一〇月一五日にリパウ港を出港し、七カ月余の航海を経てウラジオストクへ向かつていた。その来航が日露戦争の帰趨を決するものとして注目され、東郷平八郎が率いる日本の連合艦隊が対馬海峡でバル

図3



バルチック艦隊撃滅を報じて講和の期待を記した指田昇の誠一郎宛絵はがき  
(明治38年6月1日、指田和明家文書)

チック艦隊を迎撃し、勝利したことは周知の通りである。主力となる旗艦スウォーロフをはじめ六隻のロシア戦艦が沈没あるいは自沈し、残りの二隻の戦艦は戦闘不能となって降伏した。巡洋艦は撃沈三隻と自沈二隻で、その他の駆逐艦・特務船なども多くが沈没あるいは捕獲されている。司令長官のジノウイ・ロジェストウエンスキー中将も戦死し、ロシア海軍は潰滅的な敗北となった<sup>(52)</sup>。

このバルチック艦隊撃破については、戦地の指田昇が早速「バルチック艦隊大歓迎」として、「大日本万歳」を描いた図3のような手製の絵葉書を六月一日付で兄誠一郎に送っていた<sup>(53)</sup>。来航したバルチック艦隊を補足し、大打撃を加えることができた喜びを描いている。ロシア側が「見る影もなき憐むべき姿」になったことを記した。ロシア側が「此の機会」に講和を申し込むだろうと、その期待を書き送っている。

この日本海海戦の勝利は、満州で一日も早い帰国を願っていた指田昇らにとつて、願ってもない喜びであったに違いない。バルチック艦隊の大打撃をコミカルに描いていることがそれを窺わせる。バルチック艦隊の潰滅で、日本側は制海権を確保したが、それにしても日本の国力の限界はあきらかであった。満州等への大規模な出兵・補給は容易でない。大陸での戦争が優勢とはいえ、これ以上の積極的な攻勢を取ることは困難であった。一方、ロシア側には日本海海戦の惨敗で、厭戦論が強まっている。ロシア国内では、皇帝の専制的な支配に対する反発が顕在化し、戦争継続が困難になっていた。そして日本側の意向を受けた米国のセオドア・ルーズベルト大統領が、駐米ロシア大使に正式に講和交渉を行うように勧告していた。明治三十八年（一九〇五）八月にはロシアの外相セルゲイ・ウイッテと日本側外相の小村寿太郎が米国のポーツマスで会談し、日露講和談判が始まっている。

この講和交渉については、村山の岸村の原田平四郎も、新聞等で入手した情報を満州の原田寛三に書き送っていた。そこでは、米国のワシントンにおいて、日露両国談判委員の会見がはじまったこと、米国の仲介にもかかわらず談判委員が強い姿勢で対峙している旨を伝えている。「委細」は秘密と記していたが、それでも遠からず内に講和が成立するであろうと書いていた<sup>(54)</sup>。

一方、村山の中藤村外三ヶ村組合の村長臨時代理の井上善次郎も、同組合村を代表して、戦地の「出征諸士」に宛

て、米国大統領の斡旋による講和条約交渉の開始を報じていた。さらに同組合村出身の兵士の動員と戦死・戦傷者数等を左のように報じ、中藤村外三ヶ村組合の戦時下の近況を書き送っている。

「拜啓、実篤に御慰勞可申上之処、心ならずも遅延候段御宥恕被成下度、左二目下当地の召集者区分及農産概況為参考御通知申上候也

明治三十八年七月七日

中藤村組合村長臨時代理井上善次郎

出征諸士御中

現召集者其他調

中藤村 現召集動員 五十五人

現役兵 十人

依公傷免除者 貳人

依病召集解除 二人

戦病死者 七人

横田村 現召集者 三人

現役兵 一人

戦死者 一人

三ツ木村 現召集動員 三十二人

現役兵 六人

依公傷免除者 一人

依病召集解除 二人

戦病死者 四人

岸村 現召集動員 十人

現役兵 一人

依病召集解除者 三人

戦死者 一人

本年麦作ハ発芽ノ当時繁茂思ハシカラサリシモ、結実ニ当リ氣候適順ノ為メ豊作ナリシモ、收穫時ニ霖雨ノ害ヲ蒙リ一割以上減収スルノ止ムナキニ至レリ、養蚕ハ氣候兎角不順ナリシハ、上簇期ニ至リ、霖雨トノ為メ、作柄ハ六、七分ナリシモ、価格ハ一貫目二付、昨年ニ比シ七、八十錢ノ高値ナリ、織物ハ本年始メヨリ景氣挽回シ、

目下漸々好況ニシテ、四年以来ノ上景況ナリ<sup>(35)</sup>

明治三十八年（一九〇五）七月七日の段階では、中藤村外三ヶ村組合の徴兵の現役兵が一八人、召集動員者が一〇〇人で合計一一八人と記されている。戦死・戦病死者の数が一三人、負傷・病気等で召集解除になった者が一三人にのぼっていた。麦作の作柄や織物の状況は、いずれも当初の状況が危惧されたようだが、その後には好転し、戦争の勝利も続き、同村地域の人々の生活に安堵感が窺えるようになっていた。

この点、岸村の原田平四郎も戦地の寛三に宛て、戦争の不安が薄れ、さらには霧雨が打続いて心配した養蚕の發育が上向きとなったと書いていた。特に織物は、「講和見込」で「一般に景気よく各機業者其の準備に多忙を極め居候」とし、戦争が講和に向かうことで、織物価格が上昇することの期待を報じている。そして村内で生じている政治的な確執についても触れていた。中藤村外三ヶ村組合では、諸江吉五郎村長の組合公費の取扱いをめぐる訴訟が行われており、それらの対立・抗争が顕著になっていった。裁判では、花井卓藏・鈴木充美などの著名な弁護士が名を連ねたが、傍聴人が集まっても花井らの欠席で公判が延期となるなど、平四郎は裁判の混乱をも戦地の寛三に書き送っている。組合事件公判が延期に延期を重ね、いつ開廷になるやら計りがたしと伝えていた<sup>(36)</sup>。

そして、明治三十八年九月五日に講和条約が締結されると、出征兵士の帰国が現実のものとなった。満州でも各隊長から講和成立の発表があった旨の連絡が原田寛三から報じられると、平四郎は同月二四日、寛三に左のように書き送っている。

「書面に依れば、戦地にても愈々目露講和の成立を各隊長より発表せられたる由、然らば不日凱歌を奏して無事帰郷の事と愚察仕候、兼て承知の如く今更申さずとも、例へ戦闘者中止となるも任務には相変わらず奮勉以テ其素志を貫徹せんことを希望至し、先者返事ニテ余者何れ面語に讓候、衛生に者益々注意し、身体大切になされたし

明治三十八年九月二十四日

原田平四郎拜

寛三殿

(37)

講和の成立が発表された旨を伝えた戦地からの寛三の書状に対して、平四郎は戦闘中止となったことに安堵し、引



き続いて寛三が任務に精励して、近日中に凱旋することを願っている旨を返信していた。平四郎は、寛三の帰国が判然としない状況下で、先に親類の師岡長次郎の凱旋が明らかになると、一月一二日にそれを寛三に報じている。師岡実家の喜びを書き、戦地の寛三に対しては満州の寒気が暮ることを心配していた。

それにしても、指田昇は満州での対陣が長くなると、野戦病院勤務で市街地に滞在していたこともあって、金銭の不足に苦しんだようだ。三八年五月二七日には兄の誠一郎に宛て、軍人の「薄給」にては新炭や野菜どころか一杯の茶を楽しむこともできないと書き送っていた<sup>(28)</sup>。その後も病院では入院患者が減少し、陣中の徒然の楽しみとして、一カ月に二、三回の慰労会を開催している旨を報じている。誠一郎は昇に対して、その求めに応じて手紙と共に金二円を送付していたが、せっかくの送金は昇のもとに届かなかったという。昇は「金円ハ途中にて紛失候事と想像仕候」として、「斯様例沢山有之候」と書いている。いったんは送金を遠慮したが、その後も送金を期待し、誠一郎も送金を続けていたようだ<sup>(29)</sup>。

一方、原田平四郎のもとには、明治三八年二月一九日に至って、ようやく寛三から翌年二月初旬に帰国できる旨を伝える書翰が届いた。その帰国の報を知ると、平四郎は直ちにその喜びを書き、凱旋の用意を寛三に宛て返信していた<sup>(30)</sup>。軍服か和服のどちらで凱旋するのか、まずは上等な紋付羽織を用意して、四ツ谷の親類宅に届け置く旨を書き送っている。そして寛三に対して、金銭についてはいつ帰国になっても大丈夫なように四ツ谷に預けて置くこととし、凱旋に際して心配がないように配慮している。軍人への論功行賞、特に戦死者に対する賞与が話題になると、寛三の心配に配慮して元氣な帰国を何よりの喜びと伝えていた。寛三に対して、「生キテ還ルガ金鵝勲章故、決シテ懸念ナク」とし、身体を大切にして無事に帰郷することを祈っている旨を書き送ったのである<sup>(31)</sup>。

この帰国については、第一師団第一野戦病院付とされていた指田昇の場合、村山の中藤への帰宅はさらに遅れた。昇が日本に戻ったのは、明治三九年の二月であったが、昇は帰国した後もそのまま東京市内の病院で入院生活を余儀なくされている。「発肉芽」の腫瘍治療であったという。病院勤務とはいえ、厳しい風土の満州での長期の対陣で、健康を害している。昇は「凱旋土産物」に凶案入りの風呂敷が帛紗を予定したようで、その準備を兄誠一郎に依頼し

ていた<sup>(62)</sup>。昇は二月末に退院が予定されていたが、戦地からの凱旋、復帰もまた困難が多かったといえる。

## 六、日露戦争と村山地域

米国大統領セオドア・ルーズベルトの斡旋で、ロシアのウイットテと日本側の小村寿太郎外務大臣の出席したポーツマス講和会議は、なんとか明治三八年（一九〇五）九月五日に調印され、講和条約が成立した。日本は南樺太の割譲<sup>(63)</sup>、朝鮮半島における優越権、遼東半島の租借権などを獲得し、一月には第二次日韓協約を結んで韓国の外交権を接収している。

しかし、講和の内容は、領土獲得等の期待を抱いていた国民を失望させた。その反発でよく知られている日比谷焼き打ち事件が引き起こされた。日露戦争は一年七カ月に及ぶ戦いとなり、日本側が勝利したとはいえ、その間の戦死者は八万四〇〇〇余人、戦傷者が一四万三〇〇〇余人に達していた。また、財政面では、戦費が一九億八四〇〇万円余に及び、外国債は明治三八年（一九〇五）七月の第四回までに八億円にのぼっている<sup>(64)</sup>。日清戦争とは比較にならない多額の出費と膨大な死傷者を生じただけに、講和の内容に対する国内の反発は大きい。国民の多くが講和条約の内容を糾弾し、政府は戒厳令を布告して、その抑圧につとめなければならなかった。

この点、日露戦争が人的犠牲及び財政的支出の面で、中藤村外三ヶ村組合に与えた影響は少なくなかった。明治三八年の中藤村外三ヶ村組合事務報告書によれば、日露開戦の前年の徴兵制によって入営した徴集者が三五人、その後の召集によって入営した者が一二七人で、その内で戦死者は一四人、戦病死者は二人となっている<sup>(65)</sup>。戦傷や戦病者は五三人に及んでいた。同組合の明治三八年の戸数は八七五戸、人口が六六二五人であるから、五四戸に一戸の割合で戦死・戦病死者を生じている。戦傷者を含めると、一二戸に一人の割合となる。出征軍人の多くは九月五日のポーツマス講和条約締結以降に凱旋・帰郷したが、三八年末の在隊者は現役二九人、召集に係るものが三九人となっていた。

中藤村外三ヶ村組合では、日露戦争の宣戦布告直後に軍事公債を促進する協議を行っていたが、その負担額は判然としない。「明治三十八年中藤村外三ヶ村組合事務報告書<sup>(56)</sup>」によれば、前年の明治三十七年中の村政事務は、日露戦争中で「各種ノ事務ハ益々複雑」であつたという。税務会計に関しては、国税や府税については期限内に多くが納付して滞納者は少数であつたが、村税は指定の期限内に納付するものが少なく、納付者は三分の一に過ぎないとある。「督促令状発布人員百八十三人」であつたという。その原因は、「戦時中商工業ノ不振ニ伴ヒ、組合内ノ副業ノ重タル機業不振ナリシニ基因セシ」とされている。報告書には、村税滞納の「弊風」が一般に「浸染」した傾向が挙げられているが、日露戦争の負担が地域にとつて重かつたことはいふまでもない。

一方、村山の中藤村外三ヶ村組合では、明治三十九年（一九〇六）四月に入ると、凱旋兵士に対して慰労会を催している。同組合では、兵員慰勞義会の会長井上善次郎がその準備に着手していた。井上は三月二日に同会評議員の指田誠一郎に宛て、「当組合内出征諸氏モ凡婦郷セラレ候ニ付テハ、凱旋祝賀之義ニ付、篤ト御協議申度候<sup>(57)</sup>」と、同村組合役場での協議を呼びかけている。もつとも、この中藤村外三ヶ村組合は、その当初の中藤、横田、三ツ木、岸の四村を集めた組合を作る段階から対立を生じていた。組合村会議員は各村四名ずつの均等に、各村の独立性を残していたが、それでも中藤村に対する三ツ木村の反発は少なくない。

もつとも同組合の岸村の場合は、明治三十九年三月下旬に「悉皆凱旋ヲ了ル」となり、前村長の諸江吉五郎が首唱者となつて東奔西走し、「厚信会」が協賛した岸村の凱旋式の祝典を同年四月五日に実施していた。凱旋軍人に対して、「木杯老箇並ニ感謝状」を贈り、岸村凱旋軍人総代から左のような「答辞」が示されている。

「国家ノ盛衰ハ兵備ノ強弱ニ関ス、故ニ兵備強盛ナレバ其ノ国益々旺盛、兵備□弱ナレバ国家衰滅スルヤ柄乎トシテ明ナラン、現今我が帝国ハ強兵盛國ノ威影又大洲ニ輝揚セリ、見ヨ今回醜露膺懲ノ如キ、難攻不落ノ旅順ヲ撃陥シ、嚇々タル炎暑ニ屈セズ、凜烈タル寒颼ニ撓セズ、或ハ遼陽・沙河ノ陸戦、対馬海峡ノ波艦殲滅ノ如キ、海陸共ニ奏効大勝ヲ博シ、赤髯碧眼奴ヲシテ捲舌震摺慄慄トシテ言語莫カラシム、噫杜ナラズヤ、之ヲ要スルニ其

ノ功績タル独リ国家干城ノ軍人ノミニ止ラズ、延ヒテ之レガ後援タル国民ノ内助亦与リテ偉大ナルナリ、然ルニ何ゾ生等軍人ノ凱旋帰郷ニ際シ、斯クモ壯大ナル歡迎、特ニ盛典ノ招待ヲ忝フス、顧ミレバ肅然国家悠久ヲ徴スル諸君ノ美念正且義タリ、忠且勇タルヲ賛スルニ余剩アリ、今日歡迎ノ盛典ニ接スルニ当リ、謹恭且欣躍感謝ノ至ニ堪ヘズ、聊カ無辞ヲ陳シテ対露ノ大勝ヲ祝シ、併セテ歡迎ノ厚意ヲ謝ス

明治三十九年四月五日

岸村凱旋軍人総代 陸軍歩兵上等兵諸江又七謹言<sup>(68)</sup>

岸村凱旋軍人総代となつた陸軍上等兵の諸江又七は、旅順や遼陽をはじめとする海陸での大勝が、国家干城の兵力だけでなく、国民の後援・内助の結果であつたと述べている。そして、国家の「旺盛」が「兵備強盛」にあることを強調し、歓迎の式典に招待された感激を述べ、同村の厚意に対する「答辞」としていた。

この点、岸村を含む中藤村外三ヶ村組合村全体の「凱旋式」は、同年四月二五日に中藤村の御伊勢ノ森で開催された。しかし、その凱旋式は「村長井上善次郎克ク幹旋ノ勞ヲ以テ軍人ニ対サレシモ」、やはり組合村内の対立を生じていた。三ツ木村については、「軍人ノ精神ヲ忘却セシカ、犬猿ノ志想ヲ懷抱シテ勞ニ報ユルニ一人敢テ賛同セザルノ怨ヲ以テスルノ傾向ヲ呈セリ」と記されている。旧村を合併した組合村であつたことから、訴訟の係争などを生じ、日露戦争中に隠忍を余儀なくされた問題が戦後に顕在化し、その対立が表面化してしたのである。

戦死者の葬儀については、概してその戦死が確認された後、町村の兵員慰勞義会の役員等が遺族を訪問し、弔慰を送るとともに戦死・戦病死者の葬儀を「幹旋」していた。葬儀は、旧村を中心に実施され、村葬には村長、村会議員、学校の生徒、在郷軍人などが会葬している。費用は、村役場に加えて兵員慰勞義会評議員が葬儀費用を村内各戸から徴収していた。明治三十七年（一九〇四）九月に旅順で戦死した上等卒の岩品光五郎の葬儀は、三十八年四月に実施され、左の「吊詞」が読み上げられている。

吊詞

誰時明治三拾八年四月十七日、不肖乙幡与三郎清酌庶羞ノ奠ヲ以テ、故要塞砲兵上等卒岩品光五郎君ノ靈ニ告

グ、君ハ幼少ヨリ父母ヲ哀ヘ祖父母妹ヲ養ヒリ、髫年徴兵検査ニ合格シ砲兵隊ニ入營セラル、以后一身ヲ犠牲ニ  
供シテ国家ノ干城トナリ常ニ不倦不撓孜々トシテ勉勵能ク軍紀ヲ守リ、二等卒ニ昇進満期帰郷セラル、偶々我  
大帝國ハ彼ノ露國ト豊ヲ啓クニ当リ君召集ノ命ニ応ジ飄然起テ皇師ニ從ヒ処所ニ転戦、尚進デ旅順攻圍軍ニ参加  
シ戦功ヲ以テ上等卒ニ昇進、去年九月三日我軍艱苦万難ヲ排シ背面梨嵐子高地ヲ占領ス、此時不幸氏ハ敵彈ニ斃  
レ屍ヲ広野ニ披フ、真ニ哀悼ノ極ニ堪ヘズ、抑モ此地ハ敵ノ拠テ以テ死守セシ所ニシテ、其防備ノ如キ優ニ永久  
築城ノ範圍ヲ超ヘ、恰モ旅順ノ咽喉部トモ稱セラル所ナリ、今ヤ皇軍已ニ彼ノ要塞堅固砲兵ノ援助因リテ、難攻  
不落ノ旅順ヲ陥落スルニ到リタル、其偉功ハ蓋シ氏ノ武勇與テ力アルモノナリ、惜シムラクバ前途尚遼遠、氏ノ  
如キ勇士ノ貢獻ヲ待ツノ多大ナルヲ、今ヤ逝テ帰ラズ、嗚呼哀哉、然リト雖モ其ノ芳名ハ竹帛ニ垂レ、千歳不朽  
ノ龜鑑トナルベシ、奚ンゾ憾ン庶クハ來リ饗ケヨ<sup>(69)</sup>

岩品光五郎は砲兵隊に入隊して満期除隊となつた後、日露開戦にもなつて改めて召集されていた。第一回の旅順  
總攻撃の失敗の後、梨嵐子高地の攻撃を命じられ、ロシア軍の彈丸に当たつて戦死していた。上等卒に昇進したが、  
祖母と妹を残しての戦死であつた。

これらの戦死者については、国家に殉じた「英霊」として、下賜金が付与された。戦死・戦病死、及び負傷者等に  
対しては、下賜金の給付に限らず遺族あるいは障碍者への年金が付与されている。「戦病死者ノ遺族」に対しては、  
「特別賜金及扶助料」が下付された。もつとも、その賜金は、府県からさらに郡役所等を通じて給付であり、「親族知  
己又ハ隣保相扶ノ誼ニ依リ」が基本とされ、親族や地域の十分な対応が求められていた<sup>(70)</sup>。

この点、村山地域の中藤村外三ヶ村組合内の給付の実態は判然としない。北多摩郡内の町村での対応は各般に及ん  
でいるが、中藤村外三ヶ村組合内の戦死・戦病死者の遺族、あるいは負傷者への救護費が三〇〇円で、他町村に比し  
て限られている<sup>(71)</sup>。東京府から北多摩郡役所を経て町村に下付された救護費等については、村内のまとまりに欠け  
た中藤村外三ヶ村組合の対応に限界が存在したようだ。

一方、日露戦争は明治二十七年の日清戦争とは桁違いな規模の戦いであり、また中藤村が他の三ヶ村を合わせた組合

であつたことから、戦後に旧村を主体にした日露戦争記念碑が建設された。組合内の最初の建設は、三ツ木村の日露戦役記念碑で、同村の十二所神社境内に建立された。同村の比留間邦之助が総代人となつて明治三九年一月に建碑願を東京府へ申請していた。碑石には大山巖が元帥陸軍大将侯爵として「日露戦役記念碑」と書している。裏面には出征軍人名と兵事慰勞義会委員及び村会議員名が列記された。碑石は、高さが一丈六尺五寸、幅三尺三寸である。保存方法は金三〇円を保存金として郵便貯金に預け、利殖を以て保存の費用に充てることを定めていた<sup>72)</sup>。

また、北多摩郡旧中藤村の日露戦役記念碑は、赤堀の日枝神社境内に建立された。同村では、明治四〇年（一九〇七）一二月三一日付で栗原伊佐五郎外一〇名が記念碑建設願を作成し、東京府知事男爵千家尊福に宛て、左のように願ひ出していた。

一 紀 念 碑 建 設 願

北多摩郡中藤村

(中略)

日枝神社

北多摩郡中藤村字赤堀三千八百二十九番  
官有地 千二十二坪之内一坪

一、紀 念 碑

壱基

右ハ今般本村有志熟議ノ上、日露戦役紀念ノ為メ別紙設計ノ碑面建設仕度、保存費トシテ金五拾円ヲ醸集ノ上、郵便貯金トナシ、利殖充用スル事ニ致置候間、御許可相成度、信徒惣代人ノ承認ヲ得此段相願候也

右

明治四十年十二月三十一日

栗原伊佐五郎

(以下一〇名の名前省略)<sup>73)</sup>

この中藤村の栗原伊佐五郎らの願書には、信徒惣代人乙幡市三郎らの「故障無之」との「添書」が付され、翌四一年七月六日に千家尊福東京府知事から、「北多摩郡中藤村字赤堀三千八百二十九番日枝神社境内ニ戦役記念碑建設ノ

件開届ク」として、許可されていた。建設費用は九五円で、「保存費」として金五拾円を醸集している。郵便貯金とし、「利殖充用」することとして、信徒総代人の承認を受けている。忠魂碑の揮毫については、中藤村の建碑委員が赤坂の乃木希典邸を訪ねて依頼していた。乃木が承諾し、執事から精魂を込めて揮毫する乃木の姿勢を聞かされ、また手土産をも受け取らない乃木家の対応に感激したようだ。

さらに、旧岸村は明治四四年（一九一一年）三月、須賀神社境内に「明治三十七、八年役記念碑」を建立した。その除幕式の様子は左のように記されている。

「十五日、朝雲天ナリシモ北風吹キテ正午頃ヨリ晴天トナリ、午後二時三十分除幕式開會、建設委員長諸江吉五郎ノ工事竣成報告ニ次ギ、村長代理原田林七、郡會議員榎本利亮、軍人分會長進藤銀蔵、本村在郷軍人總代諸江又七、小学校長進藤周輔、職員榎本文太郎、村會議員總代吉村重次郎、厚信會總代豊泉豊吉ノ祝辭アリ、後福井久作ノ答辭ニテ閉會シ、來賓一同食堂ニテ饗應ヲ享ケ、宴會將ニ酬ナル折柄、厚信會主催村民贊助ノ下ニ催セル劍舞ハ刀鏢曼々トシテ電光ヲ台上ニ閃々タラシメ、殷タル煙火ハ以テ余興ヲ盛ナラシメ、舞士ノ淋漓タル壯動ハ以テ建碑ノ本趣ニ添フル感アラシム、夜ニ入りテハ兒童造成ノだしヲ村中ニ廻ハシ、意義昂然タル有為ノ後継國民ヲ予告スル等ノ壯絶快絶ハ是レゾ隠レタル理想郷モ斯クヤ感嘆ノ思アラシメタリ、当日出演舞士ハ本村舞士原田多蔵、豊泉豊吉、荒畑八五郎、川島直次郎、荒畑忠助、小川茂十郎、同喜作、原田嘉吉、長塩儀重ヲ始メトシテ石畑組、萩ノ尾、赤堀、原山、中藤連ニシテ、誠意克ク観客ノ胆ヲ寒カラシムル、悲痛慷慨ノ吟舞アリ、勇躍衝天ノ氣概ヲ懷カシムル快舞アリシモ、就中荒畑八五郎氏ノ舞姿ノ快感ニシテ凜烈ナリシ動作ハ、大ニ観客ノ胸襟ニ快哉ヲ呼バシメタリ」

旧岸村の記念碑は、元中藤村外三ヶ村組合の村長諸江吉五郎が建設委員長となり、日露戦争に出征した原田林七が村長代理となつて、式典に立ち会つていた。厚信會總代豊泉豊吉が祝辭を述べ、祝賀の宴席では厚信會員などが村民の協力を得て劍舞を演じている。

村山地域では中藤村外二ヶ村組合が発足していたが、その中藤、三ツ木、岸の旧村の關係が維持され、個々に記念

碑が建設されていた。戦時下の出征兵士の送迎あるいは留守家族の生計の確保など、大國ロシアとの総力を挙げた戦いの中で、旧村が地域の中核となったことを明示している。旧村の存在自体は、大正元年四月に合併した村山村となるが、その後も神社や祭祀の運営、小学校の設立・維持などは地域社会のありかたが大きく関係し、日露戦争の非常時もまた例外でなかったことが窺える(76)。

### むすびにかえて

明治三七年(一九〇四)二月一〇日にはじまった日露戦争について、北多摩郡の村山地方、とりわけ中藤村外三ヶ村組合の動向を中心に検討を重ねた。特に中藤村出身の指田昇と岸村出身の原田寛三が郷里と往復した「軍事郵便」は、判明しているだけでも二五〇通を越えた。ここでは看護手の指田と輜重卒の原田が書き送った戦地の体験、そして郷里の親族が戦地へ送った手紙、それらから知られる戦時下の村山地域の動向を追及した。

この点、指田と原田の「軍事郵便」からは、戦地の現状とさまざまな情報、とりわけ旅順や奉天での自身が直面した戦争の実際が明らかになった。そこではロシア軍の動きやバルチック艦隊の来航など、戦争全体の動向が把握され、指田や原田の戦局に対するかなりの理解が知られた。また指田と原田の両者は、大國ロシアの「横暴」に対して反発し、開戦にともなう動員も不可避な責務として受け入れ、国家に対する忠誠な一兵士として軍務に傾注している。同時に両者の往復の書翰・葉書等からは、親族や郷里の関係者との緊密な繋がりが記され、郷里への凱旋を心待ちにしている兵士の思いが窺えた。

さらに、日露戦争を支えた中藤村外三ヶ村組合では、戦局の動向が号外や新聞等で報じられ、それらに対する地域の反応は実に積極的であった。旅順陥落の報に花火を上げ、楽隊などを繰り出している。一方、戦時体制にともなう地域の対応は、「明治三十八年中藤村外三ヶ村組合事務報告書」にも、三八年中の村政事務は、日露戦争中で「各種ノ事務ニ影響ヲ及ホシ尤も繁雜ヲ極メタリ」と記されている。「平和ハ克復」後も「戦後経営」の必要で事務が複雑



になつたという。税務会計に関しては、国税や府税については、期限内に多くが納付して滞納者は少数であつたが、村税は指定の期限内に納付するものが少なく、「総員ノ三分ノ一」に過ぎなかつたと知られる。同年の村税の「督促令状」の発布人員は一八三人であつた。その不振は、戦時中の商工業の低迷に伴つて、「組合内ノ副業ノ重タル機業」が振るわなかつたことが原因とされている。報告書には、さらに村税滞納の「弊風」が、一般に「浸染」した傾向が指摘されているが、地域にとつては前述した日露戦争の負担が重かつたことはいうまでもない。

それにしても、村山の中藤村外三ヶ村組合の戦時下の対応は十分でなかつたようだ。東京府を通じた援護については、町村の側の実態を踏まえた救助申請が基本であり、中藤村外三ヶ村組合の救助金額は、三〇〇円に過ぎない(7)。三ヶ村組合内の対立が続き、明治四一年四月に戸数四〇〇戸の横田村が中藤村に合併して中藤村外二ヶ村組合に代わつたが、三ツ木村は引き続き組合からの独立を運動している。その対立は、組合の村長選出が困難をきわめ、助役が代行する事態を生じている。それらが、戦死者の遺族、傷病者に対する扶助に影響を与えたようで、それは東京府を通じた援助が限定的で、補助金の獲得が北多摩郡内で最も少ない金額となつてゐることに窺われる。

#### 注

(1) 日露戦争については、主に以下の研究を参考にした。

- 『明治三十七・八年日露戦史』全一〇巻、参謀本部編、東京偕交社、一九二二、一九一四年。谷壽夫『機密日露戦史』原書房、一九六六年。大濱徹也『明治の墓碑——日清・日露——埋れた庶民の記録』秀英出版、一九七〇年。大濱徹也編『兵士』近代民衆の記録八、新人物往来社、一九七六年。宮地正人『日露戦後政治史の研究——帝国主義形成期の都市と農村——』東京大学出版会、一九七三年。大江志乃夫『日露戦争の軍事的的研究』岩波書店、一九七六年。同『日露戦争と日本軍隊』立風書房、一九八七年。同『兵士たちの日露戦争——五〇〇通の軍事郵便から——』朝日新聞社、一九八八年。参謀本部編『明治三十七・八年秘密日露戦史』巖南堂書店、一九七七年。多門二郎『多門二郎日露戦争日記』芙蓉書房、一九八〇年。加藤陽子『徴兵制と近代日本』吉川弘文館、一九九六年。井口和起『日本帝國主義の形成と東アジア』名著刊行会、二〇〇〇年。吉田裕『日本の軍隊——兵士たちの近代——』岩波書店、二〇〇二年。前澤哲也『日露戦争と群馬県民』煥乎堂、二〇〇四年。日露戦争研究会編『日露戦争研究の新視点』成文社、

- 二〇〇五年。横手慎二『日露戦争史』中公新書、中央公論社、二〇〇五年。郡司淳『近代日本の国民動員―隣保相扶』と地域統合―刀水書房、二〇〇九年。横山篤夫・西川寿勝『兵士たちがみた日露戦争』(雄山閣、二〇一二年)。長南政義編『日露戦争第三軍関係資料集―大庭二郎日記・井上幾太郎日記でみる旅順・奉天戦―』国書刊行会、二〇一四年。
- (2) 『武蔵村山市史』資料編、近代・現代、武蔵村山市史編さん委員会、二〇〇一年。『武蔵村山市史』通史編、下巻、武蔵村山市史編さん委員会、二〇〇三年。『小平市史』近現代編、小平市史編さん委員会、二〇一三年。
- (3) 原田寛三は明治一五年四月に中藤村外三ヶ村組合の岸村に生れた。父の原田平四郎は、岸村の有力者であり、次男の寛三とともに長男の林七も召集されている。
- (4) 指田昇は、明治一三年に中藤村外三ヶ村組合の中藤村に生れた。指田家は陰陽師・神職の家系で医学に通じ、指田昇の父鴻斎(穂十郎)は中藤村原山の医師であった。長男の誠一郎と次男昇は医業を継がなかったが、昇は日清戦争後の台湾の平定作戦に出征し、日露戦争で再び動員され、第一師団の第一野戦病院附の看護手となった。誠一郎の長男一男は開業して大正から昭和初期の村山の医療に携わり、医業は現当主指田和明に受け継がれている。(『武蔵村山市医師会史』武蔵村山市医師会史編集委員会編、あかつきコロニー印刷、一九九七年)。
- (5) 外山三郎『日露海戦史の研究』上、教育出版センター、一九八五年参照。
- (6) 『日記』(乙幡泉家文書)。現役の入営は「徴集」、予備役は「召集」、「赤紙」などと呼ばれた。
- (7) 同右、明治三七年二月二十五日の条。
- (8) 『北多摩郡告示第一号』(東京都公文書館蔵)。
- (9) 『厚信会沿革誌』明治四二年四月三日改、会務整理委員 諸江又七(武蔵村山市立歴史民俗資料館蔵)。
- (10) 同右『厚信会沿革誌』。
- (11) 『明治三七年乙種、諸願届書綴、北多摩郡中藤村組合役場』(武蔵村山市立歴史民俗資料館蔵)。
- (12) 山村睦夫『帝國軍人援護会と日露戦時軍事援護活動』(『日本史研究』二五八、一九九二年)。
- (13) 『北多摩郡兵員慰勞義会準則』。
- 日露戦争開戦時の村山地域は、町村制第一一六条第二項によって、明治二年(一八八九)に中藤村外三ヶ村組合村が組織され、中藤に組合村役場が置かれていた。中藤村は旧村高が一四〇三石余、横田村が一七石余、三ツ木村が九六七石余、岸村が三二一石余で、幸久保と砂川の飛地分を併せている。中藤村外三ヶ村組合の村長は、明治三〇年四月から三六年一月まで岸村出身の諸江吉五郎が勤めていた。その後は村内の対立で村長選出が困難になり、三八年八月までは村外から菊池寿之助が事務管掌、上村行業が村長臨時代理となっている。三八年八月から四五年三

月までも村外の井上善次郎が村長職についていた。

- (14) 「軍事公債に関する協議の通知」明治三十七年二月(乙幡泉家文書、武蔵村山市立歴史民俗資料館マイクログラフ版、一一六九三)。

- (15) 「原田平四郎宛原田寛三葉書」明治三十七年三月一日・四月一日(原田拓夫家文書、武蔵村山市立歴史民俗資料館複写版)。原田寛三は、岸村から世田谷の野戦砲兵一三連隊に入營した。同家では次男寛三とともに長男の林七も召集され、林七は満州で脚気入院し、一〇月に内地に送られていた。(原田平四郎宛原田林七書状)「軍事郵便、明治三十七年一〇月二日、前掲、原田拓夫家文書」。

- (16) 「原田平四郎宛原田寛三葉書」明治三十七年五月一三日(前掲、原田拓夫家文書)。

- (17) 指田家については、村山美春「指田日記とその著者指田撰津」(武蔵村山市立歴史民俗資料館報、資料館だより、第一五号、一九九一年)、「村の知識人・指田家三代の資料」市指定文化財指田日記の周辺(特別展示解説書、武蔵村山市立歴史民俗資料館、一九九九年)、指田和明「江戸時代から明治期迄に於ける村の医療」(前掲「武蔵村山市医師会史」)、多田仁一「在村文化と近代学校教育―多摩地域等の事例から―」(二〇〇〇年)を参照。また「指田日記」(武蔵村山市文化財資料集、武蔵村山市教育委員会、一九九四年)が出版されている。

- (18) 「指田医院・島田商店宛指田昇書状」明治三十七年三月二

八日(指田和明家文書、武蔵村山市立歴史民俗資料館複写版)。

- (19) 「指田医院・島田商店宛指田昇書状」明治三十七年三月八日(前掲、指田和明家文書)。

- (20) 「原田御両親様御家内御下宛原田寛三書状」軍事郵便、明治三十七年六月二日(前掲、原田拓夫家文書)。

- (21) 「原田平四郎宛原田寛三葉書」明治三十七年六月二三日(前掲、原田拓夫家文書)。

- (22) 「水越久之助君碑」(慈眼寺跡正観世音、武蔵村山市三ツ木五)。

- (23) 「書簡(出征兵士に対する指田誠一郎の慰問状)」明治三十七年一月(前掲、指田和明家文書)。

- (24) 前掲、長南政義編「日露戦争第三軍関係史料集」。

- (25) 「指田誠一郎宛指田昇書状」軍事郵便、明治三十七年七月二〇日(前掲、指田和明家文書)。

- (26) 「指田誠一郎宛指田昇書状」軍事郵便、明治三十七年八月二二日(前掲、指田和明家文書)。

- (27) 大江志乃夫「世界史としての日露戦争」立風書房、二〇〇一年、前掲大潰徹也「明治の墓碑」。

この旅順の二〇三高地攻撃については、北多摩郡小平村の出身の神山力太郎が郷里にあてた手紙に、「二百〇三ト云フ砲台ヲ攻撃ス、此砲台ハ美ニ堅固ナル砲台ニシテ頂上ニハ砲四門有、其少シク下リタル処ニ堡壘ヲ築キ其材料ハ尺角ヲ以テ二段ニ積ミ、其上ニ南京米ノ袋ニ砂利ヲ詰メテ

- ヲ積ミ、其上ニハ鉄板ノ金ヲ張り、右之有様ナル故吾ガ砲兵数發砲撃セン共少シモ功ナク、然共吾ガ歩兵ハ勇マシク日没ヲ待チテ前進シテ砲台ノ直下迄着、敵ト吾ガ歩兵ト凡ソ七八米突ニシテ、敵ハ吾ニ（バクレツ丸）ヲ投シ其故ニ死傷尤モ多シ、其直下ニ有リテ五日間戦闘ス」とあり、堅固なロシア軍陣地の抵抗が窺われる（『小平の近代基礎史料』小平市史編さん委員会、平成二四年）。
- (28) 「御商家皆々様宛指田昇書状」軍事郵便、明治三十七年一月一日（前掲、指田和明家文書、細谷亭「小平村と日露戦争―戦地と郷里・銃後を結んだ軍事郵便」（『小平の歴史を拓く―市史研究―』第三号、二〇一一年）参照）。
- (29) 前掲「明治三十七・八年秘密日露戦史」参照。
- (30) 二〇三高地からの観測で、三八センチ榴弾砲の射撃が効果をあげ、旅順港内のロシア艦隊の撃破が確実となつていく。
- (31) 日露戦争関係の号外は、村山地域でも「旅順陥落」「外債三億成る」などが残されている（前掲、乙幡泉家文書）。
- (32) 前掲「厚信会沿革誌」。
- (33) 「原田寛三宛原田多蔵書翰」軍事郵便、明治三十八年二月六日（前掲、原田拓夫家文書）。
- (34) 「原田平四郎宛原田寛三書状」軍事郵便（前掲、原田拓夫家文書）。
- (35) 「調布市史」下巻、一九九七年、調布市史編集委員会、三七一―三七五頁参照。
- (36) 「原田寛三宛原田平四郎書状」軍事郵便、明治三十八年二月三日（前掲、原田拓夫家文書）。
- 日本の陸軍は、開戦時が一三箇師団であつたが、旅順や遼陽の激戦で多数の戦死・戦傷者を生じると、徴兵の増加をはかつて徴兵年限を改めている。それでも兵士の数が不足し、徴兵年齢を過ぎた予備役・後備役の動員も必要となり、各師団に後備師団を増設し、十分な準備がないままに兵士を戦場に送っている（前掲、大江志乃夫「日露戦争の軍事史的研究」）。
- (37) 前掲「厚信会沿革誌」。
- (38) 「原田寛三宛原田平四郎書状」軍事郵便、明治三十八年二月三日、「豊泉喜一郎宛原田寛三書翰」軍事郵便、明治三十八年二月十五日（前掲、原田拓夫家文書）。
- 原田寛三は黒溝台及び安保の戦いを身近に経験したが、その戦いは日露戦争最大の兵力を集めた奉天の戦いの前哨戦にあたる。ロシア軍の積極的な攻勢があり、砲兵連隊の原田がロシア軍の歩兵と遭遇して危うい思いをするなど、危険な段階であつた。
- (39) 「豊泉七蔵宛原田寛三書状」軍事郵便、明治三十八年二月五日（前掲、原田拓夫家文書）。
- (40) 「原田平四郎宛原田寛三書状」軍事郵便、明治三十八年二月二三日（前掲、原田拓夫家文書）。
- (41) 同右、「原田寛三宛原田平四郎書翰」明治三十八年三月九日。

- (42) 「原田寛三宛原田平四郎書翰」軍事郵便、明治三十八年三月一日(前掲、原田拓夫家文書)。
- (43) 「原田寛三宛原田平四郎・りき書翰」軍事郵便、明治三十八年五月六日(前掲、原田拓夫家文書)。
- (44) 「原田寛三宛原田平四郎書翰」軍事郵便、明治三十八年四月六日(前掲、原田拓夫家文書)。  
前掲大江志乃夫著「日露戦争の軍事的研究」は、動員された二児が共に戦死し、一家が崩壊した事例を記している。
- (45) 「原田平四郎宛原田寛三書翰」軍事郵便、明治三十八年三月一日(前掲、原田拓夫家文書)。
- (46) 「原田寛三宛原田平四郎葉書」明治三十八年八月一日(前掲、原田拓夫家文書)。
- (47) 「並木吉五郎・指田一雄宛指田昇書翰」明治三十八年三月二日(前掲、指田和明家文書)。
- (48) 「指田誠一郎宛指田昇書翰」軍事郵便、明治三十八年四月二日(前掲、指田和明家文書)。
- (49) 村山でも「謀叛統報」など、ロシア側の混乱を示す号外が伝わっている(前掲、乙幡泉家文書)。
- (50) 「原田寛三宛原田平四郎書翰」(前掲、原田拓夫家文書)。
- (51) 「明治三十七・八年日露戦史」第十卷、参謀本部編纂、大正三年、東京偕行社発行。
- (52) 外山三郎「日露海戦史の研究」下、一九八五年、教育出版センター参照。
- (53) 「指田誠一郎宛指田昇絵葉書」明治三十八年六月一日付(前掲、指田和明家文書)。
- (54) 「原田寛三宛原田平四郎書翰」軍事郵便、明治三十八年八月一日(前掲、原田拓夫家文書)。
- (55) 「原田寛三宛井上善次郎書翰」軍事郵便、明治三十八年七月七日(前掲、原田拓夫家文書)。
- (56) 「原田寛三宛原田平四郎書翰」軍事郵便、明治三十八年七月三〇日(前掲、原田拓夫家文書)。
- (57) 「原田寛三宛原田平四郎書翰」軍事郵便、明治三十八年九月二十四日(前掲、原田拓夫家文書)。
- (58) 「指田誠一郎宛指田昇書状」軍事郵便、明治三十八年五月二七日(前掲、指田和明家文書)。
- (59) 「指田誠一郎宛指田昇書状」軍事郵便、明治三十八年九月二日付(前掲、指田和明家文書)。
- (60) 「原田寛三宛原田平四郎書翰」軍事郵便、明治三十八年二月二日(前掲、原田拓夫家文書)。
- (61) 明治三十九年に北多摩郡役所が作成した「叙勲者名簿」によれば、中藤村外三ヶ村組合では、一・二六人が旭日、瑞宝等に叙され、賜金が付与されている。原田寛三は瑞宝八等で七〇円が下賜され、指田昇は旭日八等で、年金一〇〇円であった。「叙勲者名簿」東京都公文書館蔵、六二七―二六一―一六。
- (62) 「指田誠一郎宛指田昇書翰」軍事郵便、明治三十九年二月二日(前掲、指田和明家文書)。

- (63) 六月六日に米国大統領セオドア・ルーズベルトによる講和会議が提起されると、日本側は講和談判を有利に進めるために樺太占領を企図した。七月七日に第一三師団が樺太のアニワ湾に上陸し、さらに同月二四日に北樺太に上陸して占領地の拡大を図っている。
- (64) 蒲池敬「日露戦争をめぐる外債問題」(信夫清三郎・中山治一編「日露戦争史の研究」河出書房新社、一九五九年)、宇野俊一「日清・日露」(小学館、一九七六年)参照。
- (65) 「明治三十八年中藤村外三ヶ村組合事務報告書」(武蔵村山市立歴史民俗資料館蔵)。
- (66) 同右「明治三十八年中藤村外三ヶ村組合事務報告書」。
- (67) 「指田誠一郎宛井上善次郎書翰」(「指田和明家文書」)。
- (68) 前掲「厚信会沿革誌」。
- (69) 「吊詞」(内野武家文書、武蔵村山市立歴史民俗資料館複写版)。
- (70) 「戦病死者ノ遺族」に対する「特別賜金及扶助料」等は、府県からさらに郡役所等を通じた給付であり、町村等の地域の十分な対応が求められていた。
- (71) 郡司淳「近代日本の国民動員―隣保相扶」と地域統合―(刀水書房、二〇〇九年)参照。
- (72) 「三ツ木村十二所神社境内日露戦役記念碑建立願書」(「文書類纂」六二七―B四―一六、東京都公文書館蔵)。
- (73) 「神社境内日露戦役紀年碑建設願書」明治四一年一月(「文書類纂」六二八―C四―七、東京都公文書館蔵)。
- (74) 乙幡義雄「明治四十年忠魂碑建立を思い出して」。
- (75) 前掲「厚信会沿革誌」。
- (76) 旧村ごとの慰霊碑以外の墓碑は、三八年八月に比留間邦之助が神明社に「加園善一郎之碑」造立し、三九年一月には沢田泉山内に、「陸軍歩兵高橋八郎君碑」が設立されている。
- (77) 郡司淳「郡司援護の世界―軍隊と地域社会―」(同成社、二〇〇四年)参照。